

# 社会科の教育内容を基盤にした統合カリキュラムに関する一考察

— フォガティ&ストアーの所論を手がかりにして —

山田 秀和

本研究の目的は、「統合 (integration)」を視点にして社会科教育のカリキュラム編成論を体系化することである。本稿では、その一つの型として「社会科の教育内容を基盤にした統合カリキュラム」の形態を明らかにし、検討を行う。取り上げるのは、R. フォガティとJ. ストラーによるカリキュラム統合論である。フォガティらの統合カリキュラムでは、多重知能理論に基づいて様々な教科領域にわたる知識やスキル、能力を育成することがめざされている。本稿では、彼女らの著書で示された授業事例を社会科教育の一つの形に見立てて分析を行い、社会科の教育内容を基盤にして他教科領域へと学びを広げる統合のモデルを明確にした。これは、社会科のテーマや概念理解のために他教科領域の活動を組み込む統合のモデルと対比的なあり方を示すものとなっている。また、このモデルは、多様な領域に関わるホリスティックな学びを成立させることができる一方で、学習の目標や方向性が拡散し、社会に関する見方・考え方の深まりや体系化を促しにくいという課題を有している。

**Keywords** : 社会科, 統合カリキュラム, 授業構成, アメリカ, 多重知能理論

## I. はじめに

本研究は、「統合 (integration)」<sup>1)</sup>を視点にして、どのような社会科教育の形態がありうるのかを探り、その意義と課題を検討することを目的としている<sup>2)</sup>。

統合に着目する理由は、近年、通教科的で汎用的なスキルやリテラシー、コンピテンシーの育成が叫ばれているように、教科の枠組みや役割の問い直しが迫られていることにある<sup>3)</sup>。とりわけ社会科は、その影響を受けやすく、こうした議論は教科の根幹に関わるものと考えられる。教科のあり方をめぐっては様々な意見があるだろうが、議論の前に、とりうる選択肢の有用性や問題性を体系的に整理しておく必要があるだろう。

筆者は、先にT. リンドキストとD. セルウィンの所論に基づいて「社会科を中核にした統合カリキュラム」の考察を行った。その結果、社会科のテーマや概念の理解を効果的に促すために他教科領域のス

キルの活用を学習の中に組み込む統合のあり方が明らかになった<sup>4)</sup>。このモデルは、社会科の教育目標や教科固有の役割を重視した統合カリキュラムと考えることができる。

それに対して、本稿では、教科レベルの統合をさらに進めた、いわば総合学習に近いカリキュラムのあり方を考察する。したがって、ここで扱うのは、厳密に言えば社会科という教科の教育ではない。社会的な内容を用いた総合学習のカリキュラムともいえるべきものである。社会科の総合化が一層進んだ形態と考えることができるだろう。

注目したいのは、R. フォガティ (Robin Fogarty) が中心になって提唱しているカリキュラム統合論である<sup>5)</sup>。フォガティは、教師教育者や教育コンサルタントとして多数の著書を有しており<sup>6)</sup>、多重知能理論を取り入れたカリキュラムの統合を主張している<sup>7)</sup>。社会科について論じているわけではないが、統合の形を検討するための一つの型を抽出できるも

のと考えられる。

## II. カリキュラム統合の基本原則

### 1. なぜ統合なのか

フォガティは、様々な著書の中で、カリキュラムの統合を求める4つの「変化の風」について論じている。ここでは、後に示す授業事例が掲載されており、具体的な分析対象に取り上げる『多重知能を組み込んでカリキュラムを統合する－チーム、テーマ、スレッド－』<sup>8)</sup>にしたがって整理したい。本書は、J. ストアー (Judy Stoehr) と共著で書かれたものであり、多重知能理論の提唱者 H. ガードナー (Howard Gardner) が前書きを著している。本書は最新の事情に対応しているわけではないが、主張は現在にも通じている。

さて、第一の風は、理論家からのものである。脳科学の進展により記憶や学習に関する理論が蓄積されてきた。また、ガードナーを中心として、多重知能理論が提唱されてきた。これらの研究成果から、子どもが多様な学習や認識の方法に没頭できるように複合的な経験に基づくカリキュラムがもたらされていることを、フォガティらは論じている<sup>9)</sup>。

第二の風は、実践家からである。カリキュラムの過負荷は幼稚園から大学までを通して深刻だとされる。教育内容をカバーすることに必死になって、肝心の子どもが置き去りにされている現実も指摘されている。そこで、カリキュラムを統合し、教育内容を「選択的に捨てる」ことや「思慮深く含める」方法を求めることの重要性が増しているとフォガティらは考えている<sup>10)</sup>。

第三の風は、保護者から。子どもが細切れのカリキュラムで断片的に学んでいることに対する保護者のコメントを紹介し、フォガティらは、子どもの生涯を見通して学校教育のあり方を考える必要性が増していることを述べている<sup>11)</sup>。

第四の風は、子どもから。分断したカリキュラムで学ぶことを一度受ければそれでよい「予防接種」になぞらえる子どもの例を出し、フォガティらは、生涯に通じるスキルの育成やすべての子どもにとって平等な学習機会に通じるホリスティックで経験に基づく学習が求められていることを論じている<sup>12)</sup>。

以上の考察を基盤にして、フォガティらは、カリキュラム統合のモデルと多重知能のモデルを組み合わせた統合的な学習を提唱するに至っている。

### 2. 多重知能理論に基づく統合

フォガティらは、脳と学習の関係について論じた R. ケイン (Renate Caine) と G. ケイン (Geoffrey

Caine) の「12の原理」を参照するとともに、ガードナーの多重知能理論を導入する。ガードナーの多重知能理論は、従来支配的であった IQ 理論に対抗する考え方であり、当初は、言語的知能、論理数学的知能、音楽的知能、身体運動的知能、空間的知能、対人的知能、内省的知能からなるとされた。後に博物的知能と実存的知能が加えられたと紹介されている<sup>13)</sup>。それぞれの知能についての説明は省略するが、批判も含め注目を集めてきた理論であり、学校教育にも大きな影響を与えている。

さて、これらの知能はそれぞれ独立しているが、ともに作用することが提唱されている。また、従来の IQ 理論と違い、多重知能理論は、人間の可能性をより全体的・包括的に捉えることの重要性を説くものとなっている。

ガードナーの理論は、後の研究者によっても応用されてきたが、こうした研究成果がカリキュラム統合の重要な理論的基盤となっている。

### 3. 統合のモデル

では、カリキュラムの統合はどのようにしてなされるのか。筆頭著者のフォガティが本書その他の著書・論文の中で示しているモデルを整理すると、以下ようになる<sup>14)</sup>。

フォガティは、カリキュラムの統合の方法を三つに分類する。第一のカテゴリーは、一つの学科領域 (discipline) 内での統合に関するもの。三つのモデルがその中に含まれる。

- ①断片化モデル (Fragmented) = 教科 (subject) の領域を寸断した、分離独立の伝統的な分野のモデル。統合のモデルとはいえないが、カリキュラム統合の準備段階に位置づけられる。
- ②関連モデル (Connected) = それぞれの教科の領域の中で、トピックとトピック、概念と概念、ある年の学習と次の年の学習で課程の内容が結びつけられ、アイデアが明確に関連づけられている。
- ③入れ子モデル (Nested) = それぞれの教科の領域の中で、教師が、社会的スキル、思考スキル、内容固有スキルのような多様なスキルにねらいを定める。

第二のカテゴリーは、学科領域をまたいだ統合である。五つのモデルからなる。

- ④配列モデル (Sequenced) = トピックや単元が、教科間でお互いに共通性をもつように再編成され、配列される。別々の教科のままであるが、類似したアイデアが同時に教えられる。
- ⑤共通モデル (Shared) = 重複している概念や

アイデアで個々の要素をまとめて、二つの学科領域で共通の計画や授業が行われる。

- ⑥ウェブモデル (Webbed) = 創造力に富むテーマがカリキュラムの内容や学科領域に網を張る；各教科は、適切な概念やトピック、アイデアをふるいにかけて取り出すためにテーマを使用する。
- ⑦スレッドモデル (Threaded) = 様々な学科領域の間を、思考スキルや社会的スキル、多重知能、テクノロジー、学習スキルそれぞれごとの要素で貫いていく。学科領域を横断して共通したスキル等を学習することができる。
- ⑧統合モデル (Integrated) = 教師による話し合いを通して、教科間で共通するトピックや概念を見出し、それに向けて各教科の内容を構成する学際的なアプローチである。

第三の категорияは、学習者の意識の中で生じる統合である。二つのモデルからなる。

- ⑨没頭モデル (Immersed) = 学科領域が学習者の専門家としての目となる；学習者は、その目を通してすべての内容にフィルターをかけ、自分の学びに没頭するようになる。
- ⑩ネットワークモデル (Networked) = 学習者が専門家としての目を通してすべての学習にフィルターをかける。そして関連分野の専門家のネットワークに通じる結びつきをつくる。

さて、これらの統合のモデルのうち、フォガティらは、テーマに基づいてカリキュラムを統合するウェブモデルと、複数教科で共通のスキル等を学習していくスレッドモデルを代表的なものと考えてい

るように推察される<sup>15)</sup>。この二つのモデルは現在の教科を前提としても実践可能性が高いものである。本稿では、この二つの中でも特にイメージしやすく、汎用性の高いウェブモデルを取り上げ、統合の方法および授業づくりのしかたに迫っていきたい。

### Ⅲ. 統合カリキュラムにおける授業構成

#### 1. テーマによる学習の組織化

フォガティらは、ウェブモデルの授業づくりに関して、テーマに基づく統合の方法を論じている。テーマを選択する際に参考になるものとして、スタンダード(「文化」「理科」「技術」など)やトピック(「恐竜」「熊」「雨林」など)、概念(「パターン」「発見」「関係」など)、出来事(「校外見学」「ミュージカル」「スパゲティ・ディナー」など)、プロジェクト(「発明」「壁画」「キルト」など)、小説(「アラバマ物語」「老人と海」など)、映画(「12人の怒れる男」「スターウォーズ」「ゲティスバーグ」など)、歌(「スカボローフェア」「We Are the World」など)があることを示すとともに、テーマが、学習者の関心に火をつける高度に可視的な、カリキュラムや授業を覆う傘となることを指摘している<sup>16)</sup>。

では、そのような学習をどのように計画すればよいのか。フォガティらは表1に示す「T-H-E-M-E-S」というモデルでその問いに答えようとする。

学習を組織するための第一の過程は、「テーマを思い浮かべる」ことである。ここでは、教師集団でテーマの候補を本や雑誌、教科書等からブレインストーミングすることになる。また、子どもや保護者を巻き込んで候補のリストづくりが行われることに

表1 テーマによる学習の組織化ー「T-H-E-M-E-S」ー

テーマを思い浮かべる (Think of themes)	生み出す；20 から 30 のアイデアをブレインストーミングする；継続的に集め、収集する。
リストを磨く (Hone the list)	概念 (concepts), トピック (topics), 問題 (problems) の三つのカテゴリーにテーマを分類する；ふるいにかけて、三つ (それぞれのカテゴリーから一つ) を選択する。
基準を推定する (Extrapolate the criteria)	なぜそのテーマが価値があるのかをじっくり考え、理由を提案する；もう一度、それを用いる基準を深める。
テーマを操作する (Manipulate the theme)	考えられる問いを熟考する；テーマの焦点となる問いを提示する；「どのように」あるいは「なぜ」の形で高次の問いへと洗練する。
活動へと発展させる (Expand into activities)	実行可能な活動を生み出す；関連した学習エピソードをリストにする；すべての多重知能や様々なカリキュラム領域に向けて活動を盛り込む。
目標と評価を選択する (Select goals and assessments)	ねらいや目的を記述する；価値がある目標に向けて活動を整える；評価ストラテジーを決定する。

(Fogarty, R., & Stoehr, J., *Integrating Curricula with Multiple Intelligences: Teams, Themes, & Threads (2nd Edition)*, Thousand Oaks, CA: Corwin Press, 2008, p.94 より訳出。)

なる。

第二は、「リストを磨く」こと。テーマ候補を「概念」「トピック」「問題」の三つに分類し、教師同士で、それぞれの中から“チャンピオン”となるテーマを選択する。

第三は、「基準を推定する」こと。なぜあるテーマが他のものよりも価値があるのかを議論しあい、基準を明確にして、最終的に三つのチャンピオンテーマから一つを選択することになる。

第四は、「テーマを操作する」こと。何を知りたいのか、子どもたちの興味をそそり調査へと誘う本質的な問いは何か等を検討した上で、「どのように」あるいは「なぜ」という問いへとテーマを洗練させる過程となる。

第五は、「活動へと発展させる」こと。テーマを、数学や理科、社会科、言語、美術、音楽、保健、体育、技術などの様々な領域の活動へと広げていくとともに、多重知能を意識した活動にしていくことになる。子どもの選択や関心を含めることも重要とされる。

第六は、「目標と評価を選択する」こと。目標を定め、そのもとに活動を精選し洗練するとともに、ポートフォリオやパフォーマンス評価のようなオーセンティックな測定方法で評価のしかたを考える過程となる。

以上のようなプロセスを経てテーマが導かれ、領域的な広がりをもつように問いと活動が具体化されていくものと考えられるが、実際の授業は、テーマや題材の性質によって、たとえば社会的になったり理科的になったりするだろう。ここでは、社会的な内容を扱った授業モデルについて見ていこう。

## 2. 授業の実際:「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」

中学校や高等学校では、教科の境目が自明のものとされているので、カリキュラムの統合を図るためには、様々な教科領域やスタンダードにまたがるテーマを軸にするのが現実的な方法だ。フォガティらはこうした考え方のもとで、高等学校段階の事例を紹介している<sup>17)</sup>。

授業名は、「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」。中心テーマは「病気」であり、鍵となる問いは「病気は何を教えてくれるか?」となっているが、タイトルが示すように、全体的に見て、社会科の歴史学習の教育内容を基軸にした構成と考えることができる。こうした内容を基盤にして単元を配列していけば、体系的な統合カリキュラムを編成することにもなるだろう。ウェブモデルに基づく領域的な広がり、図1のようになっている。数学や保健、理科などとともに、一領域としての社会科も示されている。

この授業では、NCSSの社会科スタンダードを

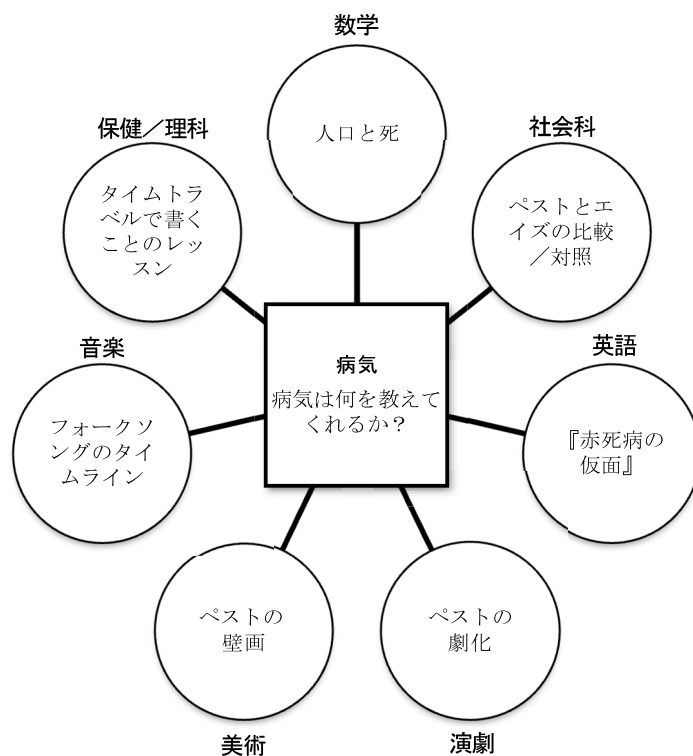


図1 「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」のウェブモデル

(Fogarty, R., & Stoehr, J., *Integrating Curricula with Multiple Intelligences: Teams, Themes, & Threads (2nd Edition)*, Thousand Oaks, CA: Corwin Press, 2008, p.127より訳出。)

はじめ、言語教科のスタンダードと音楽のスタンダードの関連部分が示されている。筆頭にあげられているのは社会科のスタンダードであり、NCSSの十のテーマのうちの七つに関連しているとされている。こうしたことから、本授業が社会科領域を中心に組織されたものと考えられる。社会科の内容を前面に出した統合的な学習と捉えることができるだろう。

授業の概要は資料1のように整理できる。なお、授業の流れは表の形式でまとめたが、その「主な関連領域」の番号は筆者が便宜的に割り振ったものである。授業は全部で11の過程に区分できる。また、領域については筆者が授業の内容と図1から判断して記載した。「主な学習活動」は、著書の記述をもとにして箇条書きでまとめた。本授業は、実際には各教科の教員の協力の下で実践されることになるだろうが、ここでは実践の組織や体制よりもむしろ、実践の内容に焦点を当てて概説していきたい。

授業は、「スカボロー・フェア」を歌い、その歌詞の意味を考察することから始まる。この歌は口頭で伝承され、時代とともに変化してきたものであり、歴史や文化を反映したものである。学習を通して、歌を解釈するためには、当時の状況を理解する必要があることに気づかせようとしている。

次に、現代の歌を、政治的、文化的、歴史的な事象と結びつけて考察し、音楽スタンダードにある「歴史や文化との関連で音楽を理解すること」をさらに促そうとしている。続いて、黒死病が流行したヨーロッパに由来するという「リング・アラウンド・ザ・ロージー」の歌詞を考察させる。「ポケットに花束さして」という歌詞は、死体の防腐処理を行うためのハーブのことを指しているという説がある。それをもとに、「パセリ、セージ、ローズマリー、タイム」という歌詞が登場する「スカボロー・フェア」を再び考察すると、黒死病の流行に結びつけて歌を解釈できる可能性が見えてくる。

そこで、協同学習を組織して、グループで歌詞についてディスカッションを行い、クラスで報告する活動が用意されることになる。

こうした活動の後に、黒死病そのものの学習が組織される。特に、ここでは人口の減少をもとにして、なぜ黒死病が封建制度を終わらせたといわれているのかについての一つの説が示されている。

さらに、一日800人の死者が出るとすると、自分の町や市がどれくらいで全滅するのかを考えさせ、当時の過酷さを知らせるとともに、数学的な能力の向上を促そうとしている。これらは、社会科や数学領域の学習に相当するものと考えられる。

その後の学習は、領域的に多岐にわたる。まずは保健／理科領域。自分たちを医者と仮定して、当時の状況を考えさせる。また、伝染病で死に瀕している人に対する治療の違いを時間軸で比較させる。

次は、美術領域。評価のための活動として、グループで黒死病の時代の中世ヨーロッパに関する壁画を作成する。

続く英語領域では、エドガー・アラン・ポーの『赤死病の仮面』を読み、病気についての理解を深める活動が示されている。

また、過去と現在を関連づける学習として、黒死病をエイズと比較したり、死体防腐処理技術を過去と現在で比べたりして、その違いを理由とともに解明していく活動が用意されている。社会科と保健、理科が関連領域といえるだろう。

最後の評価はパフォーマンス評価とポートフォリオによるもの。黒死病の時代の中世ヨーロッパを劇化させるとともに、この授業で学んだ現在と未来の自分たちの生活に影響を与えるようなことがらを日誌にまとめさせることで、子どもの理解度や学習成果を測るようになっている。

このように「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」は、社会科の歴史学習で扱う事象を題材として、様々な領域の内容へと派生させていく構成になっている。

#### IV. 社会科教育の観点から見た授業構成の特質

##### 1. 授業構成原理とその意義

フォガティらのカリキュラム統合論とそれに基づく授業事例について見てきた。ここでは、本稿で取り上げたウェブモデルの事例を中心にして、授業構成の基本原理とその意義を整理し、社会科教育の観点から考察を加えてみたい。

第一に、教科の枠組みを前提にして、共通のテーマから関連領域を派生させて授業を構成する、ということである。統合にはいくつかのレベルがあり、教科の境目を完全になくすものも想定できるが、ウェブモデルはそこまで大胆な統合を必ずしも意図しているわけではない。社会科をはじめ言語教科、音楽などのスタンダードをもとにして統合を図るという現実的な方法をとることができる。そして、ここで取り上げた事例は、歴史的な題材から他教科領域に関連した学びを促すカリキュラム、すなわち、「社会科の教育内容を基盤にした統合カリキュラム」の授業構成を示唆するものになっている。

具体的には、「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」では、「病気」という中心テーマのもとで各教科領域の内容が組織されている。中世ヨーロッパの学習ではあるが、「スカボロー・フェア」を歌い、歌詞

資料1 「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」の概要

授業名： 黒死病の時代の中世ヨーロッパ  
 対象となる知能： 統合的 (Integrated)  
 内容の焦点： 学際的 (Cross-Disciplinary)

社会科スタンダード (テーマ的ストランド) :

1. 文化
2. 時間, 連続性, 変化
3. 人々, 場所, 環境
4. 個人の発達とアイデンティティ
5. 権力, 権威, 統治
6. 科学, 技術, 社会
7. グローバルな関係

言語教科スタンダード :

1. 生徒は, 文章の理解や彼ら自身についての理解, そして合衆国や世界の文化についての理解を深めるために, 幅広い印刷物や非印刷物の文章を読む。
2. 生徒は, 人間が経験したことがらに関する多様な側面についての理解を深めるために, 様々なジャンルの数多くの時期の幅広い文学を読む。
3. 生徒は, 様々な目的で色々な読者に伝達するために種々の記述プロセスの要素を適切に使うとき, 幅広いストラテジーを用いる。
4. 生徒は, アイデアや問いを生み出し, 問題を提示することで, 論点や関心事についてのリサーチを行う。

音楽スタンダード :

1. 様々な音楽の題目を, 一人で歌ったり他者と歌ったりすること。
2. 音楽を聴き, 分析し, 記述すること。
3. 音楽と他の芸術, 芸術以外の学科の間の関係を理解すること。
4. 歴史や文化との関連で音楽を理解すること。

主な関連領域	主な学習活動
1 音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクターで歌詞を投影し, 「スカボロー・フェア」を歌う。</li> <li>・このフォークソングが何を意味しているかについてのディスカッションを行う。 (この歌は, 口頭で伝えられたものであり, その時代の歴史や文化を反映している。)</li> </ul>
2 音楽	<p><b>発展 (EXTENSION)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現代のフォークソングを用いてタイムラインを作成し, ここ50年間の出来事の結果として作曲された歌を思い浮かべる。</li> <li>・クラスのプロジェクトとして, 政治的, 文化的, 歴史的事象と歌のタイトルを記したタイムラインを作成する。</li> <li>・そのうちの一つの歌が何を意味しているのかを考える。</li> </ul> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「リング・アラウンド・ザ・ロージー」の歌について考察する。 (歴史家の中には, 1347年にヨーロッパに入ってきた黒死病の時代にその歌が生まれたという人もいる。歌詞の「ポケットに花束さして」は, おそらく, その当時, 防腐処理を行うために使用されたハーブやスパイスのことについて言及している。「ハクション! ハクション! みんな倒れちゃった」は, 死体を焼いているところを記述しているのかもしれない。これは本当かもしれないし, そうでないかもしれない。)</li> </ul>

社会科の教育内容を基盤にした統合カリキュラムに関する一考察

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・以下のことを念頭に置いて、もう一度「スカボロー・フェア」を振り返り、その歌が別の意味をもっているかを考察する。 (中世ヨーロッパで死体を保存するために使用されたハーブやスパイスは、パセリ、セージ、ローズマリー、タイムであるといわれている。それらが「花束」といわれてきたのかもしいない。ペスト流行の時期、花束を入れた小さなバッグを持ち運べば助かるという迷信を人々は生み出した。もちろん、それは役に立たなかった。)</li> <li>・それぞれの歌詞の節についてディスカッションを行う。 (その歌は、死にそうな誰かについてのものかもしれない。縫い目のないキャンブリック地のシャツは、死者を覆う物かもしれない。)</li> </ul>
3	音楽	<p>協同学習 (COOPERATIVE LEARNING)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌の三番目の節が何を意味しているのかについてグループでディスカッションをする。それぞれのグループから報告者を出し、クラスで報告する。(一つの正しい答えがあるわけではない。)</li> </ul>
4	社会科／数学	<p>黒死病についての学習 (LEARNING ABOUT THE BLACK DEATH)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・以下のことについて学習する。 (黒死病は、ネズミが運んできたノミによって、1347年にヨーロッパに持ち込まれた。ネズミは商人の船でやってきた。犠牲者の肌黒い斑点が現れることから黒死病と呼ばれた。ヨーロッパの全人口の四分の一から二分の一の人が黒死病で亡くなったと見積もられている。パリの記録では、一日に800人の人が死んだとされている。平均の法則によって、領主よりも農奴の方が多く生き残ったので、黒死病は封建制度に終わりをもたらしたと一般的には信じられている。結果として、ペストの流行の終わりには、農奴たちは債務不履行によって土地所有者となった。)</li> </ul>
5	数学	<p>死者の数を総体的に把握する (PUTTING THE NUMBER OF DEATHS INTO PERSPECTIVE)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の町や市の人口を見積もる。一日に800人が亡くなると、町や市が全滅するのにどれくらいかかるかを算定する。</li> </ul>
6	保健／理科	<p><b>【タイムトラベルで書くことのレッスン (A Time-Travel Writing Lesson)】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちが医者だと想定し、1347年当時にタイムトラベルしたとする。聞いたり、見たり、においをかいだりしたことを三つ書く。そのリストをクラスで発表する。</li> <li>・伝染病で死に瀕している人に対する自分たちの治療が、20世紀の治療とどのように違うのか、それはなぜか、について比較した小記事を書く。書いたものを数人が発表し、クラス全体でのディスカッションを行う。</li> </ul>
7	美術	<p><b>【評価：伝統的 (Assessment: Traditional)】</b> 黒死病を描写する (協同的なグループ活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループで黒死病の時代の中世ヨーロッパに関する壁画をブッチャーペーパーで作成する。出来上がった教室に掲示する。</li> </ul>
8	英語	<p><b>【誰も無敵ではないことについての学習 (Learning That No One Is Invincible)】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・エドガー・アラン・ポーの『赤死病の仮面』を読み、次の質問について考える。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. なぜ領主は城を閉ざすことによって死を免れることができると考えていたのだろうか？</li> <li>2. 招かぬざる客とは誰のことか？</li> <li>3. 『赤死病の仮面』の教訓は何だろうか？</li> </ol> </li> </ul>
9	社会科／保健／理科	<p><b>【過去と現在を関連づける (Relating the Past to the Present)】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・黒死病とエイズを比較する。それらはどのように異なっているか？ どのように共通しているか？</li> <li>・『赤死病の仮面』で学習したことを、エイズの拡大について知っていることと関連づける。</li> <li>・現代の死体防腐処理技術と中世ヨーロッパの旧式のそれを比較する。どのように、そしてなぜそれらは異なっているのか？</li> </ul>
10	演劇	<p><b>【評価：パフォーマンス (Assessment: Performance)】</b> 黒死病を劇化する</p>

		・6人から8人のグループに分かれ、黒死病の時代の中世ヨーロッパに関する3分間の劇を演じる。音や動きを入れ、グループ全員が参加する。
11	社会科	<b>【評価：ポートフォリオ (Assessment: Portfolio)】</b> <i>過去からの学習</i> ・この授業で学んだ現在と未来の自分たちの生活に影響を与えるようなことを日誌に書く。

(Fogarty, R., & Stoehr, J., *Integrating Curricula with Multiple Intelligences: Teams, Themes, & Threads (2nd Edition)*, Thousand Oaks, CA: Corwin Press, 2008, pp.127-131 をもとに作成。「主な関連領域」の番号および領域は、筆者が判断して割り振ったものである。)

の解釈を行う音楽の活動に始まり、数学や保健、理科、美術、英語など様々な教科領域にわたる学習活動が組み込まれている。教科の枠組みを利用して、広域的な活動へと広げることができるように計画されている。

第二に、広領域にわたる授業を、様々な知能の活用の観点で踏まえて構成する、ということである。ウェブモデルには、教科の領域ではなく、多重知能の領域から構想されるものもあるが<sup>18)</sup>、このような方法は、中学校や高等学校では実践が困難であろう。そこで、教科の枠組みを前提にして多様な知能の活用を組み込むという間接的な方法を、本授業事例から引き出すことができる。

「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」では、先の図1のように関連する教科領域が示されている。そして個々の領域の活動は、様々な知能の活用を意識したものになっている。たとえば、「スカボロー・フェア」を歌う活動は音楽的知能を働かせることと関連している。一日の死者の数から人口の減少の度合いについて考察させる活動は論理数学的知能の活用を意識したものだろう。黒死病を劇化することは、音楽的知能や身体運動的知能を働かせることと関係している。歌詞を解釈する際の協同学習は対人的知能の活用と結びついているだろう。

このように、教科の領域と多重知能の領域は対一の関係ではないが、フォガティらのカリキュラム統合論は、できるだけ多様な知能を活用する学習へと学びのスタイルを変革するための方法を示すものとなっている。

さて、これら二つの原理を内包する本授業事例は、教科の統合を可能な限り進めた社会科教育の一つのあり方を具体化したものと見なすことができる。現実的ではないかもしれないが、この考え方を応用すれば、社会科の教育内容を基盤にした体系的なカリキュラムを編成することもできるだろう。

そして、本授業事例は、歴史的な事象を通して、様々な領域の知識やスキル、能力の育成を促すものとなっている<sup>19)</sup>。現在の社会科の枠組みを大きく超えたものであるが、(良いか悪いかは別として)人

間形成に広く関わろうとすると、このような形で社会科教育を構想することも選択肢の一つになってくる。このモデルは、地理や歴史などの科目レベルの統合を超えて、教科レベルでの統合を果たした一つのあり方を示唆するものであり、広領域にわたる知識やスキル、能力を育成するための社会科カリキュラムの可能性を示している。

## 2. 課題

フォガティらのカリキュラム論は、社会科について論じたものではないし、社会科のあり方を示したものではない。ここでは、提案された授業を社会科教育の一つの形と見立てて考察することで、その課題を引き出したい。

第一に、教科の領域や多重知能の領域を派生的に広げようとする本モデルの場合、一つの単元や授業の中での一貫性が保ちにくいことである。

たとえば、「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」の場合、歌詞の解釈から黒死病と中世ヨーロッパの封建社会崩壊の関係を読み解くまでの過程は、一貫性が比較的強く意識されている。しかし、その後の人口減少についての計算や伝染病末期患者に対する治療の比較、死体防衛処理技術の比較などは、それぞれ有益な学習ではあるが、独立性がやや高く、前後のつながりが見出しにくい。中世ヨーロッパの学習を通して、現在あるいは未来を考えるとという視点では一貫しているものの、テーマに関係する限りでできるだけ幅広い領域に触れること自体が目的になっているようにも見える。

本来であれば、教育の目標や授業のねらいがあって、それに合わせてテーマが選択され、必要に応じて各領域の内容や関連する知能領域が選択されるのが一般的だろう<sup>20)</sup>。授業事例には、社会科や音楽のスタンダードが掲げられているものの、内容(ここでは「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」あるいは「病氣」)に即した統一的な目標やねらいは示されていない。この点に、課題の一要因を見ることができる。

第二に、様々な領域にわたるスキルや能力については鍛えられるが、それだけに知識内容の掘り下げ



が浅くなる可能性があることだ。ウェブモデルでは、一つのテーマから派生的に学習内容が配列されるため、知識の深まりよりは広がり重視されることになる。

たとえば、「黒死病の時代の中世ヨーロッパ」では、黒死病を視点にして当時のヨーロッパ社会の状況を把握することはできるかもしれないが、「なぜ」という認識の深まりは必ずしも保証されない。たとえば、黒死病の流行と封建制度の崩壊の関係性についての理解は促されているが、封建制度崩壊には他にも多くの要因があるだろう。その他、多くの領域の内容に触れることになるが、習得する知識の面から見ると、それだけ広く浅くなるのが予測される。認識内容の深まりと領域の広がりとのバランスをどのようにとるのかということが、このような学習を組織する際の課題になると考えられる。

繰り返しになるが、ここで論じたのは、フォガティらが示す統合カリキュラムとその授業を、社会科教育の一つの形と見立てた場合の課題である。本稿では論じることができないが、フォガティらのカリキュラム統合論そのものについては、さらに別の検討が必要になるだろう。

## V. おわりに

フォガティらの多重知能理論を取り入れた統合モデルは、カリキュラム改革の一つのあり方を示している。ホリスティックで子どもの経験に基づく学習を成立させるという点も示唆的だ。

そして、本稿で取り上げた授業事例からは、教科レベルでの統合を進めた社会科教育の一つの姿、すなわち、「社会科の教育内容を基盤にした統合カリキュラム」のモデルを引き出すことができた。このモデルにおいて、社会科は、学習の軸となる題材を供給する役割を担うと同時に、様々な教科領域にわたる知識やスキル、能力の育成を促すものになるだろう。

ただし、IVで指摘したように、このモデルは、授業の一貫性を保ちにくく、「広く浅く」の学習になってしまう可能性が高い。社会認識を成長させるという観点から見ると、こうした統合カリキュラムは十分なものとはいえない。先の論文で考察したリンドキストとセルウィンの統合モデルは、あくまで社会科のテーマや概念の理解に収束するように他教科領域の活動が組織されていた。それに比べると、本稿のモデルは、共通のテーマから様々な活動へと派生させていくことに重きがおかれている。そのため、学習の目標や方向性が拡散し、社会に関する見方・考え方の深まりや体系化を促しにくいということが

課題になるだろう。

本稿で示したモデルを一つの型に位置づけながら、さらなる社会科教育の選択肢を探っていきたい。

## 【注】

- 1) 本研究では、ひとまず「統合」についての体系化をめざすが、後に「分化」についても明らかにしていく予定である。
- 2) 「統合」については、数多くの研究がなされてきた。社会科教育学の代表的な理論的・基礎的文献としては、白井嘉一『社会科カリキュラム論研究序説』学文社、1989年や森分孝治「発達段階に応じた社会科における総合学習」『社会科教育論叢』第26集、1979年を挙げることができる。近年では、草原和博「米国社会科における市民性育成の構造－統合（integration）の視点から－」『アメリカ社会科のシティズンシップ教育に関する理論的・実践的研究』（唐木清志研究代表「平成18年度～平成20年度科学研究費補助金基盤研究（B）、研究成果報告書」）2009年によって、社会科という教科内部における統合のあり方が解明された。また、本稿との関わりで総合学習のカリキュラムに目を向けると、今谷順重『横断的・総合的な学習とクロスカリキュラム－新しい問題解決学習のストラテジー－』黎明書房、1997年、今谷順重『総合的な学習と特色あるカリキュラム経営』黎明書房、1999年などの代表的な先行研究がある。他にも、洪美里「アメリカにおけるカリキュラム統合と統合学習－ウィスコンシン州教育局のガイドブック『関連カリキュラムとアクション・リサーチ』に焦点を当てて－」『アメリカ教育学会紀要』第15号、2004年のように、統合の類型と実践例を示した研究もある。本研究は、それらの先行研究を踏まえた上で、豊富な事例を有するアメリカに手がかりを求め、「統合」を視点にした社会科カリキュラム編成のパターンを具体的かつ体系的に整理し検討していくことをめざしている。
- 3) こうした動きは、世界的に見られる。アメリカにおいては、2010年に出された英語／リテラシーのコモン・コア・ステート・スタンダード（National Governors Association Center for Best Practices and Council of Chief State School Officers, *Common Core State Standards for English Language Arts and Literacy in History/Social Studies, Science, and Technical Subjects*, Washington, DC:

- Authors, 2010) が、社会科や歴史学習等で育成すべきリテラシーを明示しており、それへの対応をめぐる多くの議論がなされている。
- 4) 山田秀和「社会科を中核にした統合カリキュラムに関する一考察－リンドキスト&セルウインの所論を中心に－」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第158号, 2015年。
  - 5) カリキュラム統合の基本類型については、次の文献で詳細に記されている。Fogarty, R., *How to Integrate the Curricula (3<sup>rd</sup> Edition)*, Thousand Oaks, CA: Corwin Press, 2009.
  - 6) フォガティは、コモン・コア・ステート・スタンダードが登場した後に、思考スキルの育成についても論じている。Bellanca, J. A., Fogarty, R. J., & Pete, B. M., *How to Teach Thinking Skills Within the Common Core: 7 Key Student Proficiencies of the New National Standards*, Bloomington, IN: Solution Tree Press, 2012.
  - 7) 多重知能理論は、アメリカの学校教育に影響を与えており、社会科授業づくりにも広く取り入れられているとされる。詳しくは、小川正人「アメリカの社会科授業づくり」全国社会科教育学会編『社会科教育実践ハンドブック』明治図書、2011年を参照されたい。
  - 8) Fogarty, R., & Stoehr, J., *Integrating Curricula with Multiple Intelligences: Teams, Themes, & Threads (2<sup>nd</sup> Edition)*, Thousand Oaks, CA: Corwin Press, 2008.
  - 9) *Ibid.*, p.xi.
  - 10) *Ibid.*, pp.xi-xii.
  - 11) *Ibid.*, p.xii.
  - 12) *Ibid.*, pp.xii-xiii.
  - 13) *Ibid.*, p.6.
  - 14) *Ibid.*, pp.23-41. ここでは特に、p.26に示された図表の言葉の訳出を中心にして整理している。またカテゴリー等については、注5の文献も参考にした。
  - 15) 本書ではこの二つのモデルがクローズアップされており、授業事例も記されている。
  - 16) Fogarty, R., & Stoehr, J., *op. cit.* 8), pp.87-90.
  - 17) *Ibid.*, pp.127-131.
  - 18) たとえば、小学校用の「ミス・メリーマック」という授業例 (pp.116-121) が示されている。
  - 19) 本授業事例は子どもの興味・関心や欲求にしたがって展開しているわけではないが、幅広い領域の学習にまたがるという点において、昭和22年版の小学校学習指導要領の社会科に近い形態と考えることもできるだろう。
  - 20) ガードナーも、多重知能の育成そのものが学校における教育の目標になることに異議を唱えており、「〈多重知能〉を高めることそれ自体は、教育の適切な目標ではない。むしろ、独自の立場で教育目標が確立されたときに、それが良い教育への手助けとなるのだと考えた方がよい」(ハワード・ガードナー著、松村暢隆訳『MI: 個性を生かす多重知能の理論』新曜社、2001年、p.236) と論じている。

#### 付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「教科や科目の分化と統合を視点とする小・中・高を通じた社会系教育カリキュラムの研究」課題番号26381207の研究成果の一部である。